

# 涙、涙、涙の初優勝

## パット数26。パッティングの勝利

《第14回九州女子シニア選手権競技》

～茜ゴルフクラブ

2オーバー 74

高田 雅野（西戸崎シーサイド、56歳）



賑やかな会場となった。九州ゴルフ連盟主催の表彰式では、優勝者を含め上位5人ほどが参列する。他選手は会場を離れるのが通常の光景だが、今回ばかりは違った。メダ

ル授与者以外の出場選手が20人以上も残っていた。式が終了すると、優勝者を囲んで記念撮影が始まる。ワイワイガヤガヤ。高田の人柄を示すようなシーン。そんな中で高田一人、感極まったのか、声を詰まらせる。実は優勝のインタビュー中にも両手で顔を覆ったほどである。

「やっと勝てました。2位とか4位とか。いつも一步足りなかった」

九州という初タイトルを運んできたのは、苦手としていたパッティングだった。2日前の「九州女子ミッドアマチュア選手権」ではパットに苦しみ、13オーバー85で全国大会出場を逃す。ボールを見過ぎ、動きを気にし過ぎていた。「ロングパットはボールを見らずにカップを見て打ったら」という友達のアドバイスを実行すると、見事にはまった。その象徴的なホールが12番ショート。第1打を右バンカーに入れ、第2打はカップから10mオーバー。このパーパットがジャストタッチで入る。「あれで乗っていった」。インスタートで3ホール目の一打が高田の気持ちを穏やかにする。その後もパッティングは好調。6番で3パットしたが、7番で5m、9番では2・5mのバーディーパットを沈めた。ともに同組のメンバーが高田より外につけてラインを見せてくれるツキにも恵まれたが、見事に決めた。最終9番のバーディーパットは「入れたら優勝か、プレーオフがあるかも。鳥肌が立った」という勝負所のストロークはさすがに気合が入った。パット数はイン12、アウト14の計26。グリーンを制して九州女王となった。

自らの性格を「感情を表に出す方」と分析する。それがプレーに影響し、失敗したことが何度もある。その解決方法として、ともに九州のタイトルホルダーである谷川夫妻（富夫、美帆＝長崎県佐世保市）に相談。「『いつも淡々とすること』。心の使い方、メンタルを勉強しました」。その言葉も優勝に一役買ったと想像される。

熊本県荒尾市出身。現在は福岡市在住。18歳から研修生としてプロを目指す、35歳で断念。その後、アマチュア競技に取り組み、アルバイトキャディーをしながら北山カントリー倶楽部（佐賀県）で練習に励んできた。初出場の2021年の日本女子シニア選手権では6位タイに入り、シード権を獲得した。今回は5年前以上の成績を目指す。

## 《ホールインワン》

比嘉ゆかり（ベルビーチ、63歳。125ヤードの5番ショートで達成）「入った時、『カラン』という音があった。（プライベートを含めて）7回目。沖縄でもやったことがある。保険には入っている。折角ホールインワンをしたのに前半は泣きそうなスコアだった。（日本女子）グランドシニアには出られるので九州勢として出場枠を増やすためにも頑張らないとね」

## 《茜ゴルフクラブ》

